

# 明德の乱

将軍・足利義満と山名一族の最終戦争

濱田浩一郎

「上皇になろうとした将軍」と幕府最大級の守護大名の  
決戦を詳述する  
本邦初の解説書！

最大府幕町室  
の将軍  
足利義満  
の知られざる戦い



明徳の乱

将軍・足利義満と山名一族の最終戦争

濱田浩一郎

星海社

317



SEIKAISHA  
SHINSHO



明德めいとくの乱は、南北朝時代の明德二年（南朝では元中八年げんちゆう＝一三九一年）に勃発した内乱である。室町幕府の最盛期を築いた三代将軍の足利義満あしかがよしみつが、強大な守護大名である山名氏やまなの内紛に介入し、将軍権力を確立する画期となる戦いであり、南北朝時代末期としては有数の大きな戦いでもある（近年では六代・足利義教を幕府絶頂期の将軍とする見解もある）。

しかし、明德の乱の詳細についてはあまり知られていない。

日本史の教科書『高校日本史B』を見ると、応仁元年おうえん（一四六七）に起こり、京都を主戦場とした応仁の乱は黒字で特筆されているが、明德の乱は本文には記されず「守護大名の分布」という図に記載されるのみだ。筆者は、中学・高校時代の授業において、応仁の乱という用語やその説明はよく耳にしたが、記憶が確かなら明德の乱はほぼ聞いたことがない。おそらく読者の大半も同じではなからうか。

日本史の教科書ならまだしも、歴史家が書いた著作でも明德の乱は詳述されない感がある

る。足利義満についての書籍でも、明徳の乱についての説明は二・三頁ほどということが多い。よって、明徳の乱に馴染みがない読者も多いことだろう。

明徳の乱の翌年（一三九二）には、建武三年（一三三六）以来続いていた南北朝の朝廷分裂状態が解消し、南北朝時代が終焉を迎えるが、そのこともあって「明徳の乱は、義満の南北朝合体計画の一環として引き起こされたと見ることもできる」（森茂暁『足利義満』KADOKAWA、二〇二三年、一八八頁）と評されることもある。その評言が適切か否かは別として、時代の転換点に起きた合戦と位置づけることができよう。

明徳の乱は、応仁の乱のように約十一年も続いたわけではなく、わずか一日で終結しているため、地味な乱ではあるのだが、内実を見ていくとそこには数々の人間ドラマが存在した。

明徳の乱はなぜ起こったのか。どのように乱は展開し、終結したのか。そして後世どう語られたのか。これまで、一般書や専門書でも詳述されることがなかった明徳の乱の実態を本書において明らかにしていきたい。



はじめに 3

第一章

足利義満という將軍

15

義満の誕生と兄弟たち 16

播磨避難 17

父・義詮の死 19

義満の元服と將軍就任 21

細川頼之の苦衷 23

康暦の政変——頼之の没落 25

新管領・斯波義将と義満 28



義満と公家社会 31

後円融天皇との軋轢 33

皇位継承と義満 36

義満の密通疑惑と後円融院の暴行事件 37

義満の諸国遊覧 38

## 第二章 「六分の一殿」山名一族の強勢 41

鎌倉時代の山名氏 42

中興の祖・山名時氏の言葉 44

鎌倉末の動乱と山名氏 45

守護・山名時氏の分国支配 48

観応の擾乱と山名氏 51

時氏の幕府への帰順 53

時氏の死と勢力拡大 54

第三章

物語の中の「明德の乱」

59

足利義満と山名氏 60

『明德記』の始まり 62

山名氏清の宇治不参 64

山名満幸の横田荘押領 67

氏清・満幸の叛意 69

氏清の詐術 70

山名義理の同心 72

義満、義理の真意を探る 74

義満の合戦評定 75

幕府軍の陣構えと戦略 77

山名方の評定と陰陽博士 79

氏清の野望と小林義繁の諫言 82

山名一族の戦略と誤算 84

山名方の裏切り者と幕府方の奇瑞 86

垣屋弾正忠と滑良兵庫助の誠忠 88

大内義弘の号令 90

小林義繁・山名高義の討死 92

中巻開幕——満幸の行方 95

土屋一族の覚悟 97

義満の義弘褒賞 99

満幸の奮戦と土屋一族の討死 101

將軍の進軍と鳩の奇瑞 104

氏清の攻勢 106

赤松義則軍の奮戦 108

垣屋・滑良の死 111

一色詮範の参戦 113

山名小次郎の忠義 115

哀れ！ 家喜九郎 117

小次郎の死 119

幕府方の人々の振舞い 122

山名氏清の批判 124

義満の褒賞と満幸逃亡 127

塩治駿河守の切腹 131

満幸の末路 133

山名義理の逃避行 135

『明德記』の終幕 138

終

幸

# 明德の乱の諸相

141

『明德記』の成立について 142

『明德記』作者の謎 144

『明德記』の中の虚構 150

山名氏と莊園押領 152

新田義貞と山名氏清 155

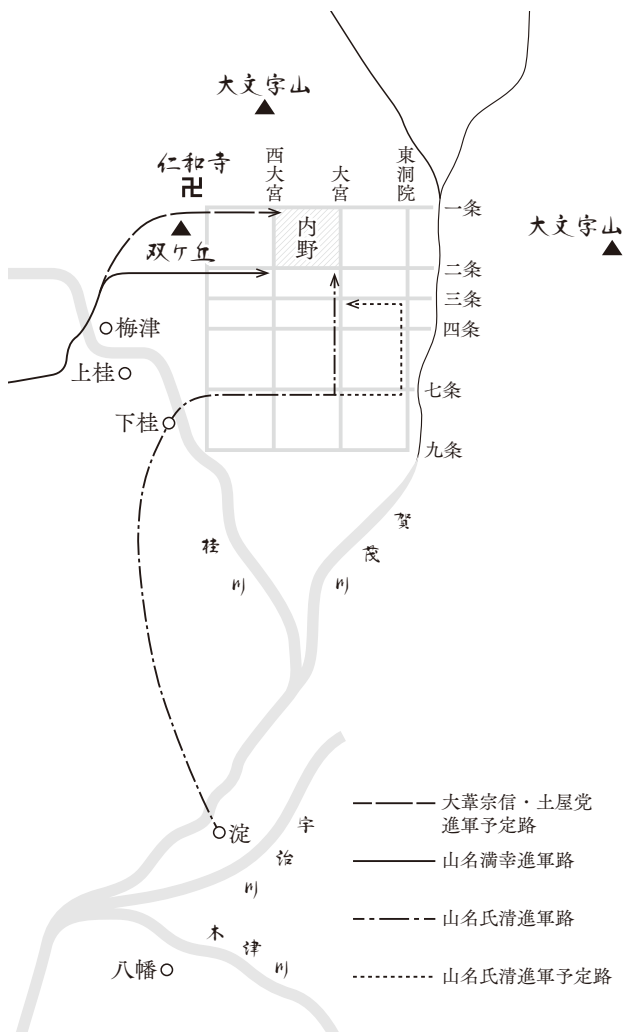
満幸誅殺の「虚構」 160

「史実」としての明德の乱 165

後世の明德の乱——新井白石・頼山陽——  
180

おわりに 188

主要参考文献一覧 193



明徳の乱における山名方の進軍路  
 (松岡久人『中世武士選書 14 大内義弘』をもとに作成)

北野の森

京極高詮  
(700余騎)

一条  
正親町  
土御門  
鷹司  
近衛御門  
勘解由  
中御門  
春日  
大炊御門  
冷泉  
二条

細川勢  
(2000余騎)

赤松義則  
(1300余騎)

西大宮

内野

千本

畠山基国  
(800余騎)

馬廻

斯波義重  
(500余騎)

義満本陣

大宮  
一色詮範  
(300余騎)

大内義弘  
(500余騎)

猪熊

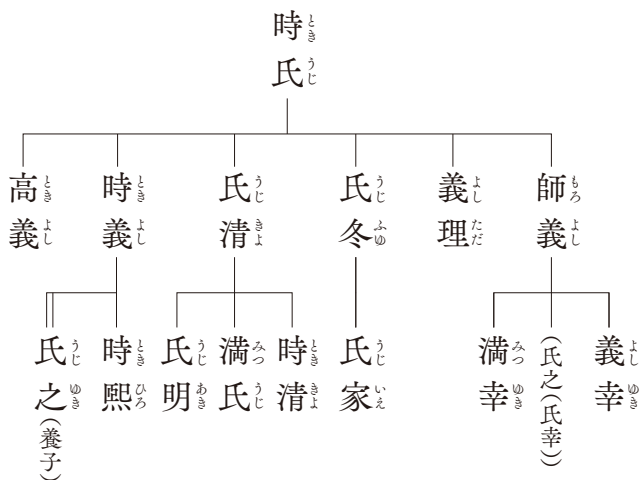
堀川

油小路

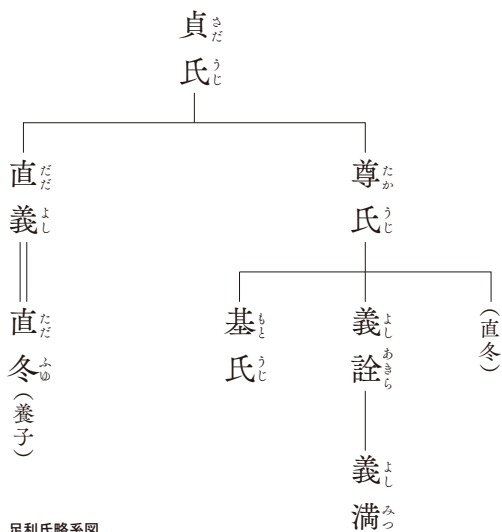
西洞院

明徳の乱における幕府方の布陣図

(松岡久人『中世武士選書 14 大内義弘』をもとに作成)



山名氏略系図



足利氏略系図



足利義満

と  
い  
う  
将  
軍

第一章

## 義満の誕生と兄弟たち

明徳の乱について論述する前に、乱に至るまでの足利義満と山名一族について説き起す必要がある。「はじめに」で述べたように、明徳の乱は義満（室町幕府）と山名氏との戦いであるからだ。両者はどのような前半生を経て、向き合い、そして対立し、乱へと突入していったのだろうか。そこで第一章では、足利義満の前半生を見ていきたい。

義満が生まれたのは、延文三年（一三五八）八月二十二日のことであった。同年四月三十日、義満の祖父で足利幕府初代將軍の足利尊氏たかうじが二条万里小路の邸で病没している。義満の父は、尊氏の子で足利幕府の二代將軍・足利義詮よしあきら。母は紀良子、石清水八幡宮祠官・善法寺通清の娘である。南北朝時代の公卿くぎょう・近衛道嗣このえみちつぐの日記『愚管記ぐかんぎ』の延文三年八月二十三日条には、昨夜、足利義詮の「愛物」（愛しい女性の意。良子のこと）が「男子」を産んだと記されている。言うまでもなく、この「男子」こそ後の義満である。同日記の同じ条文には、良子が「去年」にも「一子（男子）」を産んでいることが書かれ、今回の出産と併せて「珍重」（めでたい）と道嗣の感想が書き込まれている。道嗣は使者を義詮に遣わし、男子の誕生を賀した。

道嗣の日記からは、義満には一年年長の兄がいたことが分かるが、その名前は不明であ

る。義満兄の出生については、南北朝時代の公卿・洞院公賢の日記『園太暦』延文二年五月七日条にも記載があるが、その男子の後の消息は分からない。紀良子は他にも子を産んでおり、それが貞治三年（一二三四）生まれの足利満詮である。義満より六歳下の同母弟ということになる。義詮の子を多数産んだ良子であるが、正室ではなかった。義詮の正室は、足利氏の一門・渋川義季の娘・幸子である。幸子は観応二年（一二五一）に義詮の子・千寿王丸を産んでいるが、千寿王丸は文和四年（一二五五）に早世し、義満が義詮の嫡子（家督を相続する者）に定められる。先に触れたように、義満には同母兄がいたが、その兄が嫡子とならなかったのは、想像を逞しくすると、既に死去していたからかもしれない。

### 播磨避難

義満に話を戻すと、彼の幼名は春王といい、政所執事の伊勢貞継のもとで養育された。政所は幕府の財政や領地に関する訴訟を司る役所で、執事はその長官である。

義満が四歳の頃の康安元年（一二六一）、南北朝動乱を象徴するような出来事が起こる。足利家の執事・細川清氏が同年九月、幕府内の政争から分国の若狭国に突如出奔し、南朝に呼応したのだ。清氏や楠木正儀（楠木正成の三男）、石塔頼房ら南朝軍は十二月に大学し

て都に攻め寄せ、義満の父・義詮は、北朝の後光厳天皇を奉じて近江国（現在の滋賀県）に逃れる。一方、幼少の義満は、京都の建仁寺に匿われた後、播磨国守護・赤松則祐のもとに逃れるのであった。

赤松氏の居城・白旗城（兵庫県赤穂郡上郡町）に入った義満は、しばらく播磨赤松氏のもとで養育される。ちなみに赤松則祐は、鎌倉時代末に、鎌倉幕府の西国機関・六波羅探題を陥落させることに功があつた赤松則村（円心）の三男である。則祐は父・円心に従い、鎌倉幕府打倒に尽力した武将であり、南北朝時代においては一時、南朝に降ることもあつたが、ほぼ北朝方、足利尊氏・義詮父子に従い、活躍している。年少の義満が赤松氏のもとに避難したのも、これまでの足利氏と赤松氏のそうした関係性によるものであろう。なお、播磨に避難した幼少の義満を慰めるために上演されたとされるのが芸能「松囃子」で、この松囃子は、後に室町幕府の正月行事となる。

それはさておき、都を追われた義詮はしばらくして南朝軍を破り、京都を回復する。敗れた細川清氏は阿波国（徳島県）に逃れた。京都を逃れていた後光厳天皇も康安二年（一三六二）四月には内裏に還幸され、播磨に居住していた義満も、この前後には帰京したと推測される。都に戻る途次、義満は摂津国の琵琶塚（神戸市兵庫区）の風景を気に入り、近臣

に対し「汝なんじはこの地を昇かいて都に持っていけ」と命じたという。五歳にして王者の風格を感じさせる逸話であるが史実ではないであろう。

## 父・義詮の死

貞治三年（一三六四）三月、七歳となった義満は、乗馬始じようばはじめ（男子が初めて馬に乗る儀式）を行っている。同年八月には、父・義詮は三条坊門さんじようぼうもんの地に邸の建造を行う。これが三条坊門てい第であり、義満の時代に室町第が出来るまで幕府の重要拠点となった。翌年六月、義満は伊勢貞継邸から赤松則祐の邸に移居している。

貞治五年（一三六六）十二月、それまで幼名の春王という名だった義満は、後光厳天皇より「義満」の名を頂戴する。名前の候補については「義満」と「尊義」の二案が朝廷から義詮に提示されたが、義詮が「義満」を選択したことからそう決まったという。義満は併せて従五位下に叙爵じよやくされた。天皇から名を授与された義満であるが、元服げんぷくは二年後（一三六八年）のことになる。

翌貞治六年（一三六七）は、義満にとって大きな転機となった。父・義詮が重病となり、義満に家督が譲られたのである。義詮の発病時期については同年七月や九月という説があ

る。病に陥った義詮が、年少の義満に幕府を任せるにあたって採った策が、当時、讃岐・阿波・伊予・土佐国の守護を務める四国の有力守護、細川頼之を都に呼び寄せ、執事（のち管領）としたことであつた。時に頼之、三十九歳。細川氏は足利一門の大名であり、三河国額田郡細川郷（現在の愛知県岡崎市）を名字の地とした。頼之は細川頼春の子であり、かつて幕府の所領関係の訴訟を担当する引付方の頭人を務めたこともあつた。傍流とはいへ細川氏が足利一門であること、細川氏が元来より足利家に忠実な有力守護であつたことも、前年まで執事であつた斯波義将に代わり頼之が執事に任命された理由であろう。

斯波氏もまた足利一門であり、義将は貞治元年（一三六二）七月に執事に任命されていゝた。当時、義将は十三歳と年少であり、父・斯波高経の後見が必要であつた。ところが高経は諸将の反発をかい、貞治五年（一三六六）八月に失脚し、子の義将とともに本拠の越前国へと去つた。その後、しばらくは執事は置かれなかつたが、貞治六年の下半期、二代將軍・足利義詮の病を契機にして細川頼之が執事となる。それは、頼之が年少の義満を後見し、幕政の舵取りをすることを意味していた。同年九月、頼之は讃岐国から多くの軍勢を率いて上洛した。

しかし、頼之の執事就任を快く思わない守護大名もおり、伯耆・丹波守護であつた山名

時氏ときうじがその代表格であった。時氏が「鬱憤うつぶん」を抱いたことから「天下之乱」が勃発するのではないかと噂が流れたほどである。同年十一月、義詮は義満に家督を譲ることを朝廷に報告し、翌月三日、十歳の義満は左馬頭さまのかみ、正五位下に叙された。その四日後、義詮は三十八歳でこの世を去る。

### 義満の元服と將軍就任

足利義満は、応安元年おうあん（一三六八）四月十五日、元服する。加冠かかん（冠かん＝烏帽子えぼしを付ける役目）は新執事の細川頼之が担当し、理髪りはつ（髪を結う役目）は細川業氏なりうじ、打乱役うちみだり（衣服などを入れておく打乱箱を取り扱う役目）は細川氏春うじはる、泔杯役ゆするつき（髪を洗う湯水を入れる器・泔杯を扱う役目）は細川頼基よりもとが担った。元服の儀が細川一門により担われているのが一目瞭然いちもくりようぜんであろう。元服は公家の要素を排し「一向武家の儀」で行われた。

義満が將軍宣下せんげを受けるにしても、御判始ごはんはじめ（將軍が就任して初めて御判ごはんのみ御教書ぎょうしょに花押かおうを署した儀式）を行うにしても、まずは元服していることが前提であったため、頼之は義満をできるだけ早く將軍職につけ、武家結集の核としたかっただろう。頼之に反発する大名もいる中で、それが自らの立場を安定させる方策であったからだ。義満元服の日、頼之は

武蔵守に任じられた。

義満が征夷大將軍に朝廷から任命されるのは、応安元年（一三六八）十二月のことである。元服からわずか約八ヶ月で將軍に就任したことになる。義満、十一歳の時である。祖父・尊氏の將軍就任は三十四歳、父・義詮は二十九歳であることを考えれば、頗る若いと言えるだろう。だが、義満が文書を発給するに必要な御判始は、約四年後の応安五年（一三七二）十一月であり、將軍に就任したとはいえ、政務を執れたわけではなかった。この期間、將軍職は細川頼之によって代行されていたと言うべきだろう。

將軍代行であり、義満にとって年齢的に父のような存在とも言える頼之の頭を悩ませたのは、比叡山延曆寺であった。一三六八年、臨濟宗南禅寺の住持・定山祖禅がその著書において延曆寺や園城寺を攻撃したことに延曆寺は怒り、定山の処罰と南禅寺楼門の破却を朝廷に求めたのだ。朝廷は幕府にこの件を相談するが、執事の頼之は延曆寺の要求を撥ね付ける意向であった。延曆寺の強訴に屈すれば「武家面目を失う」ことが懸念されたのである。

応安元年（一三六八）八月二十九日、延曆寺の衆徒は神輿を奉じ、強訴。賀茂河原に神輿を振り捨てて帰山した。神輿は祇園社に回収される。延曆寺の強硬姿勢に対し、幕府は



妥協を余儀なくされた。定山の流罪るるざいを幕府は容認し、十一月二十七日、定山は遠江国とわじうみに配流される。

ところが、延暦寺はそれでも納得しなかった。翌応安二年（一三六九）四月、衆徒らは再び神輿を奉じ入洛する。頼之は強気な姿勢だったようだが、幕閣は一枚岩ではなく、延暦寺に妥協すべしとする山名時氏・赤松則祐・佐々木氏うじより頼らの諸将もいた。

七月十九日、幕府は神輿を帰座させるため、延暦寺の要求である南禅寺楼門の撤去を呑むことを勧める意向を朝廷に伝達している。幕府の譲歩であり、頼之の敗北であった。そして、南禅寺の楼門は幕府により破却され、神輿は帰座した。強硬姿勢だった頼之が軟化したのは、この問題により有力大名間の対立・分裂が深まることを懸念したためであろうか。または、延暦寺の訴えを受け入れることを要請する朝廷に屈したと言えるのかもしれない。

### 細川頼之の苦衷

頼之の悩みの種は延暦寺（山門）だけではなかった。応安四年（一三七二）、南朝から北朝に寝返った楠木正儀を救援するため、頼之は諸将に命令を下すが、武将が下知げじに従わな

いという事態が起こる。將軍代行ともいえる頼之に従わない諸将がいたということ、威令が行われていないということである。頼之は幕府内部で孤立していたと言ふべきだろうか。これに立腹した頼之は、洛北の西芳寺さいほうじに遁世とんせいのため赴おもむいたという。

翌年（一三七二）九月にも頼之の気分を害する出来事が起こる。頼之と対立していた禅僧・春屋しゅんおくみょうは妙葩めいばを天龍寺に帰住させようという動きが周囲に起こったのだ。反発した頼之は執事を辞職し、領国の四国に帰ろうとまでする。そこで自らの命令に服しない現状に嫌気がさした頼之を慰留したのが義満であった。頼之の將軍代行体制は、義満を戴くことではかろうじて維持されていたのである。

そして同年十一月二十二日、十五歳の將軍・義満の御判始が行われた。將軍職に任じられて、初めて御教書に花押を署す儀式である。儀式とはいえ、將軍権力の形成のための重要な一階梯かいていだった。義満の花押が初めて記されたのは石清水八幡宮への寄進状であった。義満は、永和元年（一三七五）四月二十五日には初めて参内（宮中に参上）し、後円融天皇と対面している（後光厳天皇は一三七四年に崩御）。元服の儀と同じように、この時も「武家之儀」（武家のやり方）で行われた。同年十一月、義満は従三位に叙される。

この頃、義満は正室を迎える。相手は日野時光ひのときみつの娘・業子なりこである。義満より七歳も年長

であった。業子は後円融天皇に仕える典侍（女官）であったが、伯母の藤原宣子（日野資名の娘）の計らいにより、義満に嫁いだという。ちなみに宣子は後光厳天皇の典侍であつて「御乳母」だつたとも言われる。義満は宣子を敬愛し、その邸を度々、訪れた。そして宣子が没すると自ら葬儀を沙汰したのである。

さて、永和四年（一三七八）三月、義満は室町の北御所に転居する。室町には鎌倉時代より公家・西園寺家の邸が造営されていた。西園寺家が菊亭・室町亭・大宮亭といった邸を営んでいたのである。その中の室町亭は、南北朝時代に義満の父・義詮によつて購入され、別荘とされた。同所は花見の名所でもあり、義詮の死去後に室町亭は崇光院に献上され「花の御所」と称された。だが、永和三年（一三七七）二月、火災により焼失してしまふ。その後、再建されずにいたものを義満が入手し、新たな邸建造のための敷地としたのだ（菊亭も併せて入手）。邸の造営が行われ、北御所が完成したため、永和四年三月に義満はそこに移る。なお南御所の完成は、永徳元年（一三八一）である。

### 康暦の政変——頼之の没落

諸大名の反発をかいながらも幕政を切り盛りしていた管領の細川頼之であつたが、それ

も限界を迎える。反頼之の急先鋒は斯波義将で、それに土岐頼康や京極高秀が加勢する構図だ。

頼康と高秀は幕府に叛逆したこともあり、頼之は彼らを討伐せよと命令を下す。ところが康暦元年（二三七九）閏四月、京極氏や土岐氏といった反頼之方の諸将が頼之の排斥を求めて都に乱入する。閏四月十四日は朝は小雨が降っていたが、次第に晴れとなった。未初刻（午後一時頃）には、多くの武士が今出川辺りにある義満の邸「花御所」に馳せ上っていると、都人の話題となっていた。

反頼之派の軍兵数万騎が一条通りを西に進み、その後、万里小路通を北行し、今出川にある義満邸を「囲繞」（包囲）したというのである。いわゆる「御所巻」、諸大名の軍勢が將軍の御所を包囲し、幕政に対して要求や異議申し立てを行ったのだ。その時、邸には義満・満詮兄弟がいたという。酉刻（午後六時頃）には、南方に火の手が上がる。細川頼之の邸に火が放たれたのだ。そして、頼之は三百余騎でもって「没落」（都から退去）する。これは、義満が使者を頼之のもとに遣わし退去を促したものだと言われる。

以上の記述は、南北朝時代の公卿・三条公忠の日記『後愚昧記』（康暦元年閏四月十四日条）に拠る。同書に拠ると、今回の騒乱は、佐々木大膳大夫高秀・土岐伊予入道（直氏）

ら「一揆衆」の所行だという。義満が同意した上での行動なのか、諸大名が義満邸を包囲した上で頼之の追討を迫ったものなのかは分明ではないが、同書は多分、義満同意の上での行動だとしている。

これがいわゆる「康暦の政変」である。

康暦の政変を記録した史料には、他には『愚管記』（公卿・近衛道嗣の日記）がある。その閏四月十四日条には、朝、義満は「花亭」（花御所）に向かい、武将や勇士を招集していたとある。細川頼之が下国することについては、既に内々に義満から命令があったという。諸大名も異議はなく、酉刻、頼之は兄弟・親類らと共に「没落」する。頼之の兄弟・郎従ろうじゆうらは自らの宿所四・五ヶ所に放火し、都から去ったと書かれている。「打手」（討手）は派遣されなかった。去年（一三七八年）の春頃より、頼之と諸大名との間に確執が見られ、義満一人が頼之を「鼻眞ひしき」している状態であったが、問題は解決せず、ついに今回の事態に至ったと『愚管記』は記す。

康暦の政変という同じ出来事を記録した二つの日記を見てきたが、差異があることが分かる。

『後愚昧記』は、反頼之派の武将に邸を取り巻かれた義満が、頼之の排斥を迫られて、頼之

に退去を促すという流れになっている。一方、『愚管記』は、義満が予め頼之に退去を命じ、頼之はそれに従ったという構成である。どちらが正しいか確定できないものの『後愚昧記』の記述の方が信憑性があるとされている。いずれにしても、約十一年の長きにわたり將軍代行として、幕政を主導してきた細川頼之は讃岐へと去った。

### 新管領・斯波義将と義満

康暦元年（一三七九）閏四月十四日の康暦の政変により、長年管領を務めた細川頼之は都を去り、代わって新管領に任命されたのは斯波義将であった。義将は観応元年（一三五〇）の生まれと考えられるので、管領就任時は三十歳だった。義満より八歳年上である。義満と二十九歳年上の頼之の關係が親子關係のようであったことを思えば、義将は義満にとつて年の離れた兄といったところか。

斯波義将と細川頼之は康暦の政変の前から犬猿の仲であった。永和三年（一三七七）六月、義将の領国である越中国において、守護代・斯波義種と国人との合戦が勃発する。敗れた越中国人らは同国新川郡の太田荘に逃れるが、そこは細川頼之の所領であった。

しかし、斯波氏の軍勢は太田荘にも乱入し、敵勢を討ち荘内を焼き討ちまでしたのであ

る。当然、頼之は怒り、越中国に攻め込もうとする。この事件では諸大名も双方に分かれて対立したので「天下の重事」や「天下の珍事」と噂される（『後愚昧記』七月十三日条、八月八日条）。騒乱状態になるかと思われたが、この時は大事にならずに済んだ。とは言え、痼<sup>しこ</sup>りは残っていたはずであり、それが康暦元年閏四月に至り爆発したと言えようか。

康暦の政変後に話を戻すと、兄弟・親類と共に四国に落ちた頼之への追討令が康暦元年九月に発せられている。例えば、義満の花押が据えられた康暦元年九月五日付の文書（伊予国の河野通直宛て）に拠ると「武蔵入道常<sup>じょうきやう</sup>久」（頼之）の「叛逆」が露見したので、伊予国の軍勢を率いて「退治」せよと河野通直に命じられている。通直は頼之軍と戦い、その年の十一月に戦死する。一三七八年八月に既に右大将に任命されていた義満は、康暦の政変により頼之の羈<sup>き</sup>絆<sup>はん</sup>から脱却することになった。

これまで繰り返し見てきたように、頼之は諸大名と対立し、幕政は混乱していた。頼之が管領のままでは混乱状態が続くことになるとして、義満は管領交代を視野に入れていた可能性もあろう。将軍代行ともいべき頼之がいつまでも幕政の中心にいることは、成長した義満にとっては好ましいことではなかったとも思われる。義満が幕府の最高実力者になるためには、頼之の追放が必要であったと言えよう。

新管領となった斯波義将は、將軍・義満を上回る権力を有した訳ではない。あくまで義満を補佐する立場であつた。後に「当世武門の重人」と称えられた義将であるが、大守護ではなく、分国も少ないこともあり、権力基盤は脆弱だつた。よつて、義将は義満に扈從した管領と言われている。

前管領・細川頼之は、対立した比叡山衆徒からも「廉潔の誉有り」と称賛されたことがあつたが、一方の義将は公家・一条経嗣から「優美を以て先と為す」（一条経嗣の日記『荒曆』応永三年八月一日条）と評された文化人でもあつた。経嗣は義将に『源氏物語』や『狭衣物語』を贈呈しているが、そのことも義将の嗜好を表していると言えよう。それもあつて経嗣は義将に感じ入つていたのである。

義将は「脆弱なる管領」で「義満への扈從と奉仕」の側面が指摘されることがあるが、唯々諾々としていた訳ではない。

例えば、永徳元年（一三八一）、管領辞退を表明することもあつた。辞職表明を受けて、義満は義将のもとを訪れ、種々「問答」したという（九月十六日）。義満が赤心でもつて義将を説得したことが功を奏し、義将は辞職を撤回する。

では、義将はなぜ管領を辞職しようとしたのか。それは、義満が康暦の政変で没落した



細川頼之やその一族（頼之の弟・頼元）復権を目論んでいたことが理由であった。

同年六月五日には、頼元の邸で義満を招待しての酒宴が催されていたが、そこには斯波義将や山名時義ときよしの姿があった。細川氏と斯波氏の関係を考えれば、義将は不参加となりそうであるが、実際はそうではなかった。これは、義将と細川頼元との関係が破局的なものでなかったことを示しているように、酒宴の席で両者を接近させようとする義満の意図も働いていたかもしれない。酒宴は「快然」（心地よい）なものであったという。斯波義将は、明徳の乱が勃発する明徳二年（一三九一）の三月まで管領を続投する。

### 義満と公家社会

足利義満が造営を進めていた室町第は、永徳元年（一三八一）には完成し、同年三月には後円融天皇が行幸された。行幸の際、義満が庭上に下りて舞踏すると、公家衆「家礼の人々十五六人」が皆、庭上に下りて蹲踞そんきょしたとされる。これは、公家衆の一部が義満に臣従していたことを示しているように。義満は廷臣（朝廷に仕える公家）に対して高圧的に振舞うようになる。

同年六月、義満は内大臣に就任するが、それに関連して「大饗だいきょう」という廷臣を招いての

宴会が催行された。そのとき宴会に遅刻した二条にじょう 為遠ためとほを義満が追いつ返す、という出来事があつた。

二条為遠の先祖は『新古今和歌集』の撰者（編集責任者）で歌人として著名な藤原定家ていけで、為遠は一三七五年、義満の推薦で勅撰ちやくせん和歌集『新後拾遺和歌集』の撰者となつてゐた。しかし為遠の大酒の気質もあつてなかなか完成せず、それを義満は「不快」に感じていたようである。そうした経緯があつての大饗への遅刻である。為遠は義満に追いつ返され、同年八月、病没してしまふ。為遠はそれまでも遅刻を繰り返してゐたが、大饗への参列と行列扈従という義満の命令に背そむいたことが致命的だつた。朝廷では大目に見られていたことが、義満の時代には通用しなくなつていたのである。

義満は遅刻に厳しく、永徳元年（一三八二）冬の早朝に催行された將軍家の先祖供養くわう行事（等持寺八講）に遅刻した僧侶や廷臣も追いつ返してゐる。関白・二条良基の子息の一条経嗣けいすけは、早朝より行われる仏事のため、払暁ふつぎょうから出勤する公卿・殿上人てんじやうびとがゐることを記し、彼らが「薄氷を履ふむ」戦々恐々とした状態だと述べてゐる。そして、そのような事態を「嗚呼おの時」（馬鹿な時代）と冷ややかに見てゐた。仏事には殿上人二十人余が参列したが、彼らに大した仕事はなく、ただ佇たんでゐるのみだつたという。それでも彼らは退出すること

はなかつた。理由は「主公」（義満）の「嚴命」を恐れたからである。

義満は内大臣であったが、足利家の先祖供養のために公卿を動員できる権限などない。それでも義満が強行したのは、公卿たちをできる限り動員し、自らの権勢を誇示する目的があつたのだろう。

永徳二年（一三八二）正月、内大臣から左大臣に転じた義満は寺院の建立を計画する。こうして室町第の東隣に建立されたのが、禅宗寺院の相国寺しょうこくじであつた。ちなみに「相国」とは「国を相みる」との意であり、かつまた「太政大臣たいじょうだいじん」の別名でもある。国政を統轄せんとする義満の野心が感じられる。

### 後円融天皇との軋轢

鎌倉幕府の三代將軍・源実朝みなもとのさねとも以来、久方振りに武家でありながら大臣となつた足利義満。任大臣の大饗は盛儀であり、大臣・納言・参議ら廷臣が参加した。普段、朝儀や政務に余り出席しない廷臣らが、義満主催の大饗にはほぼ出席した。武家の義満が廷臣をも支配する事態を時の後円融天皇も苦々しく眺めていたことであろう。京都の土地の支給は天皇の専権事項であつたが、それを義満に懇願こんがんする公卿まで登場した。元内大臣の三条公忠

である。

公忠は莊園が押領されて苦しいので、京都の土地（四条坊門町以東地一町）を獲得したいと義満に仲介を懇願したのだ。義満は「京都の地のこと、公家御計なり」と要求を受け入れない意向を示していたが、懇願に根負けし、將軍が朝廷に政治的要請を行う「武家執奏」により、朝廷に公忠の要求を伝達した（一三八一年八月）。これに対し朝廷は、京都の土地は公家が沙汰するところであるのに、武家執奏を通して、土地取得を申し入れるのは「奇怪之至」と反発した。後円融天皇は立腹していたという。公忠が望む土地は他の者に与えらるゝとされ、公忠の希望は潰えるかに見えた。ところが八月二十四日、天皇は一転して公忠の要求を叶える綸旨を発給する。その代わり、公忠の娘で後宮に入り、後円融天皇の子（幹仁親王、後の後小松天皇）を産んでいた厳子を追放するとしたのだ。

公忠は焦り、厳子の追放を思い止まるよう懇願した。すると、天皇は「土地を所望しないことを義満に伝えよ。そうでなければ、武家執奏の要請を容れないことが朝廷の咎になつてしまう。辞退すれば別の土地を与えよう」と迫るのであった。武家執奏の要求を拒否することが「公家御咎」になるとは、武家執奏の影響力の大きさが窺えると共に、足利義満の権力増大を知ることができるといえる。やがて公忠には別の土地を与えるとの綸旨が届けられ

た（九月三日）。公忠は安心したであろうが、十一月十七日、天皇は「京都の土地を現在の領有者から没収し、本来の持ち主に返す。ただし、二条良基と三条公忠の土地は、武家執奏なので除外する」との意向を表明する。

しかも天皇は「先日与えた土地を辞退せよ。さもなければ厳子を咎める」と公忠に伝達し、公忠はこれに従うのである。武家執奏を通して自らの願望を達成しようとした公忠への意趣返しであった。

武家の要求を拒否した際、どのような目に遭うか、天皇はその同じ年（一二三八年）に思い知ることになる。右近衛府の右近庁頭という下級管理職にあった大石範弘は、後円融天皇の怒りを買ひ、代わりの者を任命することになった。義満は中原職富を後任に執奏するが、天皇は不満であったのか、即諾しなかった。

これに義満が怒った。義満の激怒に慌てた後円融天皇は、後任人事を許可する綸旨を出すも、義満は綸旨を突き返してしまう。そればかりか、右大将辞職を申し出るのである。摂政・関白を務めた二条良基の仲介と、天皇と義満の終夜の会談により、義満はようやく右大将辞表を撤回する。天皇は、廷臣を従える義満が右大将を辞職し、孤立してしまうことを恐れたのである。

## 皇位継承と義満

後円融天皇は皇子・幹仁親王に譲位することを望んでいたが、譲位に關しても足利義満の支持が必要であった。天皇は皇位継承について何度か義満に諮問しもんを繰り返している。天皇としては、幹仁親王への譲位について義満が全面的に賛同し、かつそれを公言してほしかったのである。

義満は幹仁親王への譲位に賛意を示しながらも、最終決定は天皇が行うよう進言した。次期天皇を義満が推薦することによる世論の反発などのリスクを危惧したのであった。

そして、永徳二年（一三八二）四月十一日、後円融天皇が譲位し、幹仁親王が踐祚せんそした。後小松天皇の誕生である。幕府（義満）は譲位に伴う費用は負担し、諸儀の沙汰も行った。後円融は上皇となり、院政を布く。

皇位について天皇は即位式を行うが、即位式の準備過程においても後円融院と義満の確執が生じる。即位式の準備について、義満が院に促した際、院からの「御返答」はなかった。この院の振る舞いに、義満は「腹立」（立腹）したという。義満は摂政・二条良基の協力を得つつ、即位式（十二月二十八日）を執り行う。後小松天皇はわずか六歳で年少ということもあり、式においては義満の介助を受けた。天皇の後見が義満であることは一目瞭然

であった。後円融院は、即位式を欠席した。これは前代未聞のことであった。

十二月二十九日、幕府は院に馬を献上し、元日の行事の費用を進上したが、院は「御違例」(病氣)と称して、それらを全て突き返した。その際、院は「生きていても仕方がない」と仰つたという。後円融院の精神が不安定になっていることが見て取れよう。しかし、義満は院の言動を聞いても「驚動」しなかつたとされる。院による正月の儀式は「一切停止」された。院中は格子を下ろし、閉門した状態であり離宮のようだったという。院政がこのような始まり方をしたのは、前例のないことと評された。

### 義満の密通疑惑と後円融院の暴行事件

永徳三年(一三八三)正月二十九日、院は亡き父・後光厳院の仏事を催行するも、公卿・僧侶らは列参しなかつた。義満の威を恐れたのである。院の義満に対する怒りは沸点に達し、正気を失わせ、二月一日夜、ついに一大事件が起こる。すぐに参上しなかつた上、藤局・厳子(後小松天皇の生母。三条公忠の娘)に怒り、院は局に乱入し、刀の峰で散々に打ち据えたのである。厳子は大量出血し、気を失うほどであった。院の母である崇賢門院は我が子のもとを訪れ、酒でもてなす間に厳子を実家に避難させた。さすがの義満もこの事

件には驚愕し、医師を派遣させた。

事件後、後円融院は、寵愛ちようあいしていた女官・按察局あぜちのつばね（橘知繁の娘）を出家させ、追放している（二月十一日）。やがて義満が院を流刑に処すとの噂が入ると、院は「切腹する」と口走ることもあった（二月十五日）。三月一日には、義満は院に対し「按察局とは密通していない」との誓文せいもんを提出している。よって、院は按察局と義満とが男女の仲にあると疑っていたのだと推測される。三条厳子を打ち据えた背景にも、院が厳子と義満との関係を疑っていたことがあると言われている。

翌日、院は実母・崇賢門院の邸に移る。これは、義満の提案であった。

「聖運の至極なり」（天皇・皇室の命運が尽きる）と公卿・一条経嗣を絶句させた一大事件であったが、義満の適切な処置もあり、無事に収束する。後円融院は、当時、義満と同年の二十六歳。その後、上皇として権力を持つことなく、明德四年（一三九三）に三十六歳で崩御することになる。

### 義満の諸国遊覧

朝廷をも主導する実力者となった足利義満であるが、有力諸大名を完全に承服させてい



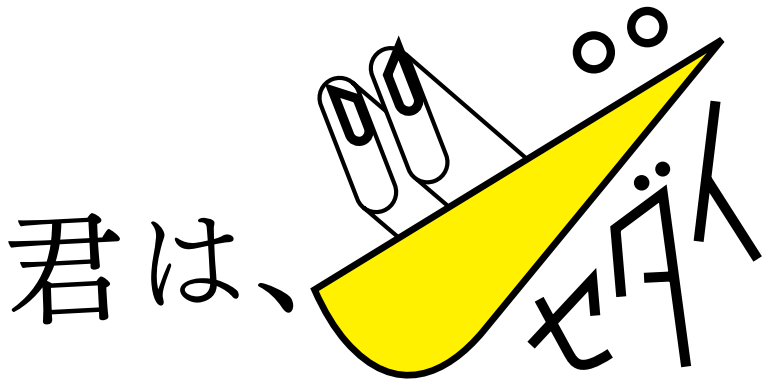
た訳ではなかった。例えば、土岐頼康（美濃・尾張・伊勢国守護）は細川頼之と対立し、独断で美濃国に下向したこともあったし、その甥の土岐詮直の軍兵は頼之罷免を要求し、室町第を包囲したこともあった。康暦二年（一三八〇）正月、頼康は上洛するが、義満はそれを喜ばなかったという。しかしそれでも義満は土岐邸を訪問し、融和に努めた（五月二十七日）。

嘉慶二年（一三八八）頃より、義満は諸国遊覧を行った。同年春、義満は高野山に参詣し、紀州を遊覧している。紀伊国には南朝方の軍兵が多く、もし、遊覧の際に彼らが蜂起すれば、義満は自ら征伐するつもりであったという。その年の秋には、義満は駿河国に下向し、富士山を遊覧している。

翌年（一三八九）三月、義満は重臣を引率し、安芸国の厳島社に参詣した。義満は九州にまで赴く意向であったが、大風のため長門国で足止めされ断念している。康暦二年（一三九〇）九月には、義満は北国に進発し、越前国気比社に参詣する。東は駿河国、西は長門国、北は越前国と広範囲の遊覧を毎年のように行っていることが分かる。駿河国への下向は、鎌倉公方（第二代）・足利氏満への示威であったとも言われている。氏満は康暦の政変に際し、義満打倒を画したこともあり、警戒されていたのであろう。駿河への途次には

土岐氏の分国もあり、土岐氏への示威も含まれていたとされる。

西国下向の際には讃岐国の宇多津うたづに立ち寄り、元管領の細川頼之と会談している（帰途に再会談）。明徳二年（一三九二）、頼之は上洛し、政界に復帰するが、その伏線として本会談は注目される場所である。安芸厳島への途次には、山名氏の領する備後国も存在した。当時、守護・山名時義は重病であり、その子・時熙ときひろが義満を出迎えている。明徳の乱の序章とも言える事件が勃発するのは、義満の安芸遊覧の一年後、一三九〇年のことであった。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**